

「広開寺院門」

今年（平成13年）の新春記念法座のご講師にお招きしました藤田徹文先生が、あるところで、「先生、何でお寺にお参りせないかんのですか？」と尋ねられたことがあったそうです。その時のことを、先生は次のように話されています。

・・・何でお寺に参らんといかんのですか？」という問には面食らいました。答がないですよ。なぜならば「米は何のために食べるのですか？」と問われるのと同じで、食べるために作られたはずですから、食べるのが当り前で、それ以外理由がないのです。

お寺もそうです。何のために参るのか。

お参りするために建てられたのです。

そのことで『改邪抄』という書物に、「浄土真宗のお寺はこういうわけで建てられたのです」ということが書いてあります。

それによりますと、親鸞聖人以前の仏教は、一部の貴族や特権階級の人のためだけのものであって、一般民衆は全く相手にされていなかったのです。

お寺参りもお話も中々聞けない私たちのご先祖は、何の遠慮もなく、普段着のまま飛び込んで行って、いつでも腹を割って、み教えを聞かせてもらえる、そんな場所が欲しいと思われ、苦しい生活を切り詰めて、お寺を建てられたのです。

そのお寺に「何で参らないかんのですか？」と問われても返事に困るわけです。

お寺はご門徒や有縁の者が遠慮なく集い、み教えに出遭って頂くための場所なのです。……

お経には「広開浄土門」と説かれています。

つまり、浄土の門はいつも開けっ放しだということです。

それは「何の気兼ねも要りません。普段着のまま入ってらっしゃい。いつまでもあなたを待ち続けます」という阿弥陀さまの深くて広いお心の表われです。

そして、それはお寺にあっては、「広開寺院門」と、言えると思います。

阿弥陀さまは、いつまでもあなたのお参りを待ち続けて下さっているのです。

平成13年4月 「光明寺だより15号」より